

西上州，下仁田町周辺にみられる在来キュウリの 産地分布と形態的な特徴

Distributions and morphological characters of the traditional local cucumbers
in west Joushu region, central Japan

小川 滋之*
Shigeyuki Ogawa

キーワード：在来野菜，シベリア系キュウリ，地域資源，平原きゅうり，持倉きゅうり

Key words : traditional vegetable, siberian cucumbers, local resources, Hebara kyuuri, Mochigura kyuuri

はじめに

食の安全性が叫ばれる昨今，伝統野菜や地方野菜などという在来野菜の存在が見直されている。京野菜（京都府）や加賀野菜（石川県金沢市），江戸東京野菜（東京都）などは，地域の野菜としてブランド化することで付加価値が生まれ，それを地域おこしや品種の保全に役立てようとする試みである（阿部 2015）。しかし伝統野菜などとして指定を受けたもの以外にも，各地には古くから生産されてきた在来野菜が存在する。それらは，高度経済成長期以降に種苗企業が開発した一代交配のF1品種が台頭すると，生産体制や品質管理の面から絶滅の危機に瀕するもの，あるいは人知れず絶滅したものが多くなった（芦澤 2002）。F1品種に置き換えられることで，密接に関係する郷土料理や伝統文化などが失われることさえ危惧されている（西川 2013）。

キュウリは，ヒマラヤ山脈南部山麓のインド東北部シッキム付近が原産であり，その後の6世紀頃に中国から日本へ伝来したとされている（青葉 2013）。当初は薬用として伝来したため，それほ

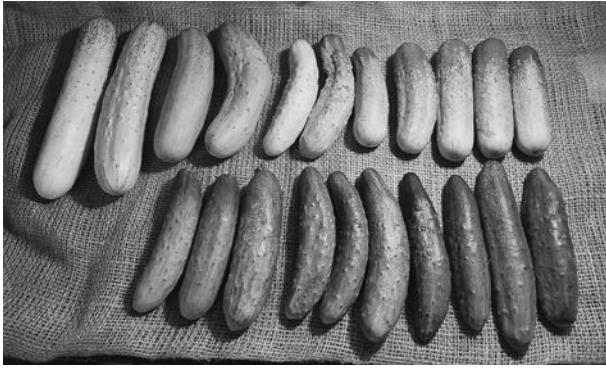
ど流通することはなかったが，戦後の施設栽培の技術革新によって周年生産が可能になってから一般的なものになった。国内で流通する品種は，華北系（夏季収穫型）あるいは華南系（早生収穫型）が一般的であり，日本海側地域を中心にシベリア系（短実型）を受け継ぐものがみられる（青葉 2013）。それに加えて品種間で容易に自然交雑することや，古くから品種改良が行われてきたことから様々な在来品種が生まれている。

西上州の下仁田町周辺では，「平原^{へばら}きゅうり」（下仁田町）や「持倉^{もちぐら}きゅうり」（神流町，上野村）などと呼ばれる短実型（シベリア系）の特徴を受け継ぐ在来品種が存在する*¹。産地となる地区の集落以外では，あまり知られることもなければ流通もなく，その広がりについては不明である。現在，いずれの集落でも高齢化が進行しているほか，一代交配のF1品種との雑種化による絶滅が懸念される。また，近隣の群馬県中之条町などの「入山^{いりやま}きゅうり」や高山村の「高山^{たかやま}きゅうり」（地域の伝統野菜，群馬県農政部蚕糸園芸課ぐんまブランド推進室 2013），長野県佐久市の「佐久古太^{さくこだい}きゅうり」，

2020年1月19日受付。2020年2月10日受理。

* 静岡大学農学部 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 zairai.vege@gmail.com

Faculty of Agriculture, Shizuoka University, 836 Ohya, Suruga-ku, Shizuoka 422-8529, Japan



第1図 群馬県、長野県にみられる在来キュウリ
 高山村「高山きゅうり」(上段左から1-2本目)、長野原町「入山きゅうり」(3-4本目)、中之条町「入山きゅうり」(5-7本目)、佐久市「佐久古太きゅうり」(8-11本目)、下仁田町「平原きゅうり」(下段左から1-3本)、上野村「持倉きゅうり」(4-10本)。農産物直売所などで販売されていたものを撮影。

須坂市の「^{はっちょう}八町きゅうり」(信州の伝統野菜、長野県HP)などのシベリア系在来品種との関係も興味深い(第1図)。これらを明らかにすることは品種としての保全のみではなく、用いられる郷土料理などの食文化の保全、さらには地域資源としての活用につながることも期待ができる。

以上のことを踏まえて、本研究では下仁田町周辺地域にみられる在来キュウリの産地分布と、周辺のシベリア系在来品種との比較から形態的な特徴を明らかにして、その誕生背景を考察した。なお、本稿では下仁田町周辺にみられる在来キュウリの総称を西上州キュウリと表記する。

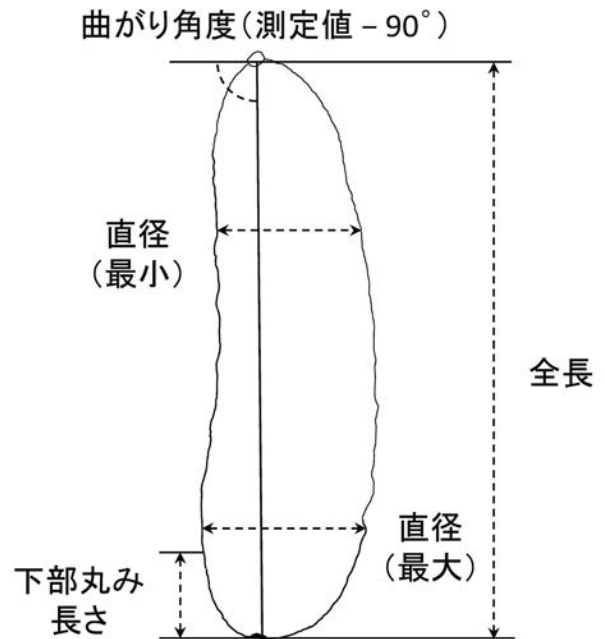
材料と調査方法

本研究では、在来キュウリの産地分布と形態比較の調査を行った(第2図)。産地分布の調査は、西上州キュウリについて事前に情報があつた下仁田町と上野村、南牧村、神流町の農産物直売所や行政機関の関連部署において2019年6月から10月にかけて実施した。地域で呼ばれている名称、来歴、販売期間の聞き取り、個体の確認を行った。

形態比較の調査は、群馬県下仁田町と上野村のほか、中之条町と長野原町、高山村、長野県佐久市、須坂市の果実を試料に用いた。各市町村の農産物直



第2図 各調査地と方法
 ○：産地分布の調査(聞き取り)、●：形態比較の調査(試料入手)。下仁田町と上野村では両方の調査を実施。



第3図 キュウリ果実の計測方法

売所などにおいて30個体を入手して，最大と最小の直径，全長，最下部の丸み部分の長さ，果実の曲がり角度を計測した（第3図）．産地内での個体差と試料数の少なさを補うため，できる限り異なる生産者（各産地5名）の個体を収集した．

西上州キュウリの産地分布

西上州キュウリは下仁田町，上野村，南牧村で個体を確認した（第1表）．いずれの町村においても，販売名は「きゅうり」という名称のみであり，一般的な品種との区別はなかった．来歴については，1950年代には栽培されていたものの，それ以前のことは不明であった．

町村ごとにみると，下仁田町では平原地区を中心に「平原きゅうり」と呼ばれているが，その存在がまったく知られていない地区もあった．「道の駅 しもにた物産販売館」と町内のスーパーマーケットで7月上旬から9月上旬頃まで，複数の農家が出品していた．上野村では「持倉きゅうり」と呼ばれており，神流町持倉地区に由来する種子を用いて生産されている．「道の駅 うえの」と「上野村ふれあい館」で6月下旬から9月上旬頃まで，複数の農家が出品していた．南牧村では，一般的な品種と区別して「昔きゅうり」と呼ばれることもあり，村内では比較的広い地域で生産されている．「道の駅 オアシスなんもく」では，農家1軒のみ，7月上旬から8月下旬頃まで出品していた．神流町では，持倉地区で作られているという情報はあるものの，町内でもまったく流通はしていなかった．

在来キュウリの形態的な類似性

在来キュウリの果実形態を比較したところ，地理的に近い地域間での類似性が高かった（第4図）．下仁田町「平原きゅうり」と上野村「持倉きゅうり」の2町村間のほか，長野原町と中之条町「入山きゅうり」，高山村「高山きゅうり」の3町村間でも類似性が高くまとまりがあった．この要因には，近隣の町村の関係であり人的交流の中で種子のやり取りが行われたこと，キュウリが他家受粉であり交雑が起こったことなどが考えられる．

下仁田町と上野村の個体の特徴をみると，比較的細身で短小，最下部の丸み部分が長い（不鮮明）ことが類似している．南牧村（群馬県）でもよく似た個体を確認，神流町でもよく似た特徴を聞き取りできた．他方で，同じ群馬県内の長野原町と中之条町，高山村の個体，さらには長野県佐久市と須坂市の個体とは果実の直径が明確に異なった．今回は調査項目には含めていないものの，成熟による果実の色の変化にも違いがみられるかもしれない．以上のように形態的な特徴をみると，「平原きゅうり」や「持倉きゅうり」などの西上州キュウリは，近隣の在来品種とは明確に異なることが分かった．

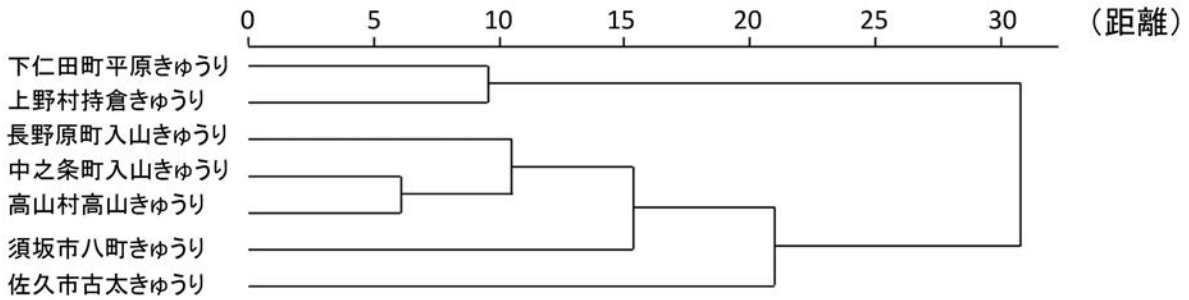
西上州キュウリの伝来と誕生背景

西上州キュウリの伝来について，他のシベリア系在来キュウリの来歴から考察する．この仲間には，加賀太胡瓜（石川県）や高岡太胡瓜（富山県），酒田胡瓜（山形県），及部胡瓜（渡島半島，北海

第1表 西上州キュウリの地域名と来歴，販売所と期間

地域	地域名	来歴	販売所	販売時期										価格/分量	
				6月 (中)	6月 (下)	7月 (上)	7月 (中)	7月 (下)	8月 (上)	8月 (中)	8月 (下)	9月 (上)	9月 (中)		
下仁田町	平原きゅうり	1950年代以前	道の駅 しもにた物産販売館			○	○	○	○	○	○	○			100-150円/2-3本
			町内スーパーマーケット			○	○	○	○	○	○			100-150円/2-3本	
上野村	持倉きゅうり	1950年代以前	上野村ふれあい館			○	○	○	○	○	○	○			100-150円/2-8本
			道の駅 うえの			○	○	○	○	○	○	○			100-150円/2-8本
南牧村	昔きゅうり	1950年代以前	道の駅 オアシスなんもく			○	○	○	○	○	○			100円/2-3本	

*西上州の町村において聞き取り，個体の確認ができた地域の情報より作成．神流町では，持倉地区での栽培情報のみのため対象外．



(産地ごとの実測値)

地 域	直径(cm)		最小/最大	全長(cm)		下部丸み(cm)		曲がり(°)
	最小	最大		最大直径/全長	下部丸み/全長			
下仁田町 (平原きゅうり)	2.6	4.4	59.1	17.4	25.2	2.7	15.5	8.8
上野村 (持倉きゅうり)	1.8	3.4	52.9	15.5	21.9	1.9	12.3	14.4
長野原町 (入山きゅうり)	2.9	4.3	67.4	18.4	23.4	1.6	8.7	18.8
中之条町 (入山きゅうり)	2.6	3.7	70.2	14.5	25.5	1.6	11.0	13.3
高山村 (高山きゅうり)	3.7	5.0	74.0	21.1	23.7	2.0	9.5	9.2
佐久市 (佐久古太きゅうり)	3.1	3.9	79.5	13.5	28.9	1.1	8.1	2.0
須坂市 (八町きゅうり)	3.3	4.3	76.7	15.2	28.2	2.0	13.2	23.3

* クラスタ分析には、各産地の対象30個体の直径(最小/最大)、全長(最大直径/全長)、下部丸み(下部丸み/全長)、曲がり角度の平均値を用いた。

第4図 在来キュウリにみられる形態的な類似性

道) など日本海側地域が産地となる品種が多い(青葉 2013)。その中でも酒田胡瓜と及部胡瓜には、江戸時代中期(18世紀)には栽培が開始されていた記録があるため、それ以前にシベリア方面などから渡来したと推定されている(青葉 2013)。そしてこれに従うならば、上州キュウリもいずれかと起源を同じくし、日本海側経由で伝播してきたと考えられる。

さらに太平洋側方面におけるシベリア系在来キュウリの分布をみると、群馬県山間部までは「入山きゅうり」と「高山きゅうり」がみられるものの、群馬県平野部や埼玉県などにはみられない。たとえば、埼玉県の在来キュウリ「奥武蔵地這きゅうり」は、華北系あるいは華南系の特徴を強く受け継ぐものである(野口 2008)。近いところでは、福島県の

「小白井きゅうり」(いわき市編 2010) や、静岡県の「井川地這いきゅうり」(プロジェクトZ・在来の味を愉しむ会編 2014) も、シベリア系(短実型)を受け継ぐものとみられるが、いずれの産地も東北地方や南アルプスの山間部に位置することから事情は異なる。これらのことから西上州キュウリは、最も太平洋側平野部に近い地域に位置する品種といえることができる。日本海側経由のシベリア系の流れからみると、伝播の最先端に位置する品種とも、華北系あるいは華南系との境界に位置する品種ともいえるかもしれない。

次に西上州キュウリの立地環境から誕生背景をみると、産地となる下仁田町平原地区と神流町持倉地区は隣接しており、両地域とも標高が高く最も奥

まった山間部の集落である。他のシベリア系の在来品種の産地についても、標高が高い山間部の孤立集落に伝わる事例（プロジェクトZ・在来の味を愉しむ会編 2014）が報告されている。そのため、周辺とは異なりやや冷涼な気候が卓越することから、現代的な改良品種（F1品種）の栽培にも適さなかったか、最も奥まった集落であることからF1品種の栽培自体が広がらなかった。そして郷土料理や風習文化にも合うなどの条件から、長年にわたり種苗選抜が繰り返されて特有の形態が誕生した。現在まで在来キュウリとして守り伝えられてきたと考えられる。

おわりに

現在、下仁田町周辺では、在来野菜として「下仁田ねぎ」（下仁田町など）、「コンニャク」（下仁田町など）、「在来インゲン」（南牧村など）、「宮崎菜」（富岡市宮崎地区）が知られており（成瀬・堀 2009）、これに本研究の西上州キュウリが加わることを確認した。しかし世界文化遺産や日本ジオパークに認定されるなど、文化的にも地学的にも特色がある地域であることから、高度経済成長期以前には多くの品種が存在したと推察される。在来野菜は、地域の文化財というべきものであり、一種でも多くの品種が発掘されて保全されることを期待したい。地域資源として「下仁田ねぎ」や「コンニャク」に次ぐ、新たな名物として活用しても面白いといえる。

注

*1 在来キュウリの産地となる集落の出身者による説明より。

謝 辞

本研究は、令和元年度下仁田ジオパーク学術奨励金「上州姫街道，下仁田付近に残る在来作物の探索」（小川滋之）の一部を使用して行った。また、下仁田町自然史館の関谷友彦氏，下仁田町歴史館の大河原順次郎氏をはじめ，多くの皆様に在来キュウリについての貴重な情報や試料の提供をしていただいた。ここに記してお礼申し上げる。

文 献

- 青葉 高 (2013) 日本の野菜文化史事典。八坂書房，東京，499p.
- 芦澤正和 (2002) 地方野菜の復権。タキイ種苗株式会社編，都道府県別地方野菜大全。農山漁村文化協会，東京，11-16.
- 阿部希望 (2015) 伝統野菜をつくった人々「種子屋」の近代史。農山漁村文化協会，東京，251p.
- いわき市編 (2010) いわき昔野菜図譜。いわき市，いわき，61p.
- 群馬県農政部蚕糸園芸課ぐんまブランド推進室 (2013) ぐんまの食材セレクション100。群馬県，高崎，47p.
- 成瀬宇平・堀知佐子 (2009) 47都道府県・地野菜／伝統野菜百科。丸善出版，東京，348p.
- 長野県，長野県（信州の伝統野菜）HP
<https://www.pref.nagano.lg.jp/enchiku/sangyo/nogyo/engei-suisan/yasai/>（最終閲覧日2019年12月9日）
- 野口 勲 (2008) いのちの種を未来に。創森社，東京，185p.
- 西川芳昭 (2013) 作物の多様な品種の種・種子をそれぞれの地域で守る意味。西川芳昭編，種から種へつなぐ 育てて守る在来種・固定種の種。創森社，東京，17-38.
- プロジェクトZ・在来の味を愉しむ会編 (2014) しずおかの在来作物－風土が培うタネの物語－。静岡新聞社，静岡，207p.

(要 旨)

小川滋之(2020)西上州, 下仁田町周辺にみられる在来キュウリの産地分布と形態的な特徴. 下仁田町自然史館研究報告, 5, 35-40.

群馬県下仁田町周辺地域にみられるシベリア系在来キュウリ(西上州キュウリ)の産地分布と形態的な特徴を明らかにして, その誕生背景を考察した. 産地は, 下仁田町(平原きゅうり), 上野村(持倉きゅうり), 南牧村(昔きゅうり)に分布し, 各町村とも1950年代からは栽培されていた. 果実の形態は, 比較的細身で短小, 最下部の丸み部分が長い(不鮮明)ことが特徴であり, 近隣にみられるシベリア系品種とは明確に区別できた. 西上州キュウリの産地は, 日本海側地域に多いシベリア系品種の中でも太平洋側平野部に近い地域にみられる. しかし, それでも周辺よりも標高が高くやや冷涼な気候が卓越する地域であり, 最も奥まった山間部の集落であった. この環境下で, 郷土料理や風習文化にも合うなどの条件から, 長年にわたり種苗選抜が繰り返されて誕生した. 現在まで在来キュウリとして守り伝えられてきたと考えられた.